

「開卷有益」

理工学部教授 岳 五 一

中国の古い成語の中には、現代人が読んでもすぐには意味がわかり難いものが少なくない。しかし、「開卷有益」はそうでもないだろう。“本を読めば知識も得られ、何かとためになる”、という意味で字の如くである。この語は元来、「帰去来の辞」や「桃花源記」で日本でも有名な田園詩人、陶淵明（陶潜）の一文「開卷有得、便欣然忘食」に由来している。この意味では、“読書すれば得るところが多く、楽しくて食事もあるほどである”であって、さらにこの「開卷有得」が「開卷有益」と書かれるようになるのは、陶潜から500年余り経た10世紀後半、北宋の太宗の言葉による。太宗は太平興国年間に1000巻から成る百科全書『太平御覧』を編纂させた。完成当初は『太平総類』という書名であったが、多忙な政務にもかかわらず、太宗が毎日三巻を読んでいたのも『太平御覧』と改められた。あるとき臣下の一人が「皇帝様は大事な政（まつりごと）に多忙であらせられるのに、毎日寸暇を惜しんでこの書を御覧になられておられます、そのご苦労はさぞや」と述べた。すると、太宗はこう答えた、「開卷有益、朕不以為勞也」（本を紐解くことは朕には大いにためになることである、疲れなど全く感じない）。この時から「開卷有益」という成語になったといわれる。

人類が創造し得た数々の道具の中で、書物は最も人を感嘆させるものの1つであろう。これらの創造物を人体に譬えるならば、インターネットやメディアの出現は感覚器の発展、自動車は足の発展、コンピュータは計算能力の発展とも言えるだろう。しかし、書物はそれらとは異なり、記憶と想像の発展なのである。古人曰く、「本を三日間読まないと、会話は味気なく、容貌が醜くなる」と。いささか厳しいが、よく考えると理にかなっているのではないか。読書好きの人が長い間本に触れなかったなら、それはきっと細々とした煩わしい事に気が散ってしまったためかもしれない。このような生活は人を忙殺し、思想を浅く平凡にする最大の原因となる。

精神の髄から沸き起こる魂の叫びを文字にしたのが書物である。書物は精神の滋養物だから不足すれば、生活に欠陥が生じてくる。我々は現実を離れて生活することはできないが、つかの間の読書を怠らないでいると頭脳の清澄さと敏捷さが整ってくる。古今東西の書物を知ることにより、人間はどうして生まれてきたのか、そしていかに生きていくべきなのか、人間の根本問題が少しずつでもわかるヒントが得られる。

確かに、書物すべてが聖人の手によるもので完璧な作品でありはしない。本の作者が我々と同じ人間であり、彼らの思想や意図はしばしば浅くて、誤りも少なくない。しかしながら、特に世界文学は本当に素晴らしい作品が多い。その時代に生きた人々の姿が目蓋の裏に焼き付く程、強烈に印象づけられる作品が多々ある。文章に鏤められている作者の思想など真に含蓄が深い。いかなる1冊の本でもいい加減に書いたものがない。文学ならずとも様々な種類の作品を通して、その国や時代に生きる人たちの思想を学ぶことは心が躍るものである。世界は悠久の歴史の中で、各国独自の民族的伝統文化を形成してきた。その優れた部分は、伝承の内に不断の蓄積を経て、民族の衰えることなき内的凝集力となる。書物を通してその経験や歴史も学べる。歴史を学ぶことは、より良い未来を築くためにも同じ過ちをくり返さないためにも必要不可欠である。

さて、読書の厳しい側面にも触れねばならない。文字を読んで自分の頭で理解する過程は、思考能力を増すためにも大事である。逆に言えば、読書に際しては思考力が必要となる。これは気を使うことである。書物の中に述べてあることが間違っているかどうか判断

しなければならない。かつて正しいと思っていたものがなぜ今間違いとなったのか、かつて誤りだと思ったのは単に自分の知識が浅いせいだったのか、現在信奉している真理は疑う余地がないのか。更に、読書に際しては勇気も必要とする。受け入れ難い事実と告白を受け入れる勇気、知らない心の衝動を迎える勇気、無言の激しい非難と叱咤を受ける勇気である。また、読書には一種の軽蔑も必要とする。文章が浅薄または扇動的であるものが依然としてよく売れている、文章に意義がなく、また少し毒薬（時には華麗な包装が付けられている）を有するものが流行している。ただ、軽蔑の中にも逆説的な別の一種の意義を獲得することができるかも知れない。

世の中は、新旧交替、内外交流、有為転変の繰り返しである。グローバル化の中、いかにして各国の優れた文化の伝統を発掘し、外来文化に正確に対応し、その国の特色を備えた新たな文化を打ち立てるかという問題は、ますます重要となっている。書物は人類文化の産物であり、人間と本は切っても切れない関係にあることは周知の通りである。

我々は細々と煩わしい日常生活から逃げるように本を読むべきではない、幅広い読書は我々をして成熟させ、更に堅実な生活を送れるようにしてくれる。小学生が仏頂面の先生に恐々と近づくように、また、アルコール中毒の人が焼酎の瓶に向かって走るように書物に近づくのではなく、頂上に到達せんとする登山者の如く書物に向かうべきである。